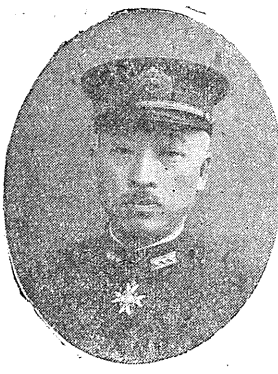


# 最後の大戦は海に決つた

## 友貞大軍佐に太平洋作戦を聴く



記者 先づ最初に大東亜戦争の大勢特に太平洋作戦の現段階について伺ひ度いと思ひます。

友貞大佐 始めのうち、大東亜戦争勃發初頭からガダルカナル島の轉進までの間、米英が敗戦に敗戦を重ねて來た原因は、日本と米英の兩方の心構へといふ點において、日本が斷然勝れてゐたからであります。即ち換言すれば、米英は日本に對して油斷をしてゐたのであつて、日本の傳統である立上りに機先を制したのが、米英の敗けた最大の原因であつたのです。その後彼等は日本に對する考へ方を一變し、我々は日本の家が、木造だからすぐ燃けてしまふと思つてゐるが、それは日本人の鐵のやうな心をもつて、完全に防護されてゐると日本の心構へを見なほし、挽回策として、政治的にも戰略的にも非常な緊張をもつて、準備しきつたのであります。所が日本は、緒戦以來あまり順調にゆくので、この分なら先は大したことはないだらうとの安易感に捕はれた傾がありました。フィリッピンで少し抵抗があつたが、印度洋上の海戦でもツヤバ沖、珊瑚海々戦でも、事實日本軍は破竹

の勢ひであつた。實力の差は本當に赤子の手をねぢるやうに開きがありました。全くこちらの作戦通りにいつたのです。そこで今後この調子で行けるものと考へたものもあり、又一般もその考へで、今後は文化工作をやらう、大いに資材の獲得をしやうと、少し方向がそれた感があつた。ツヤバ沖海戦以後は殆んどさういふ情態でした。そこで兩方の心構へが、開戦當時とは反對の立場となつたので、ガダルカナル島の南方に伸びるべき前進が一時足踏みをしました。その時に米國は反抗進撃の態制を整へて大決心をしてやつて來たのであります。つまりこの心構への差がガダルカナルに現はれたのであります。爾來半歳に亘る決戦死闘は、ガ島の形相を一變するまでに續行せられましたが、遂に轉進することになりました。一方歐洲戦線では、樞軸國が北阿から撤退して、反樞軸國が勢力を得て來たので、アリユウシヤンのアツツ進攻を決行することになつたのではないかと思はれる。

記者 作戦上の行動であつたことは、いふまでもないと思ひますが、現段階は氣持の上から相當敵に對する影響があつたと思ひますが。

友貞大佐 勿論敵もガ島の占領、山本司令官の戦死、アツツ島の玉碎で氣勢は相當なものと思ひます。

記者 最近、航空機に重點を置くやうにいはいはれ、航空母艦の獨逸など叫ばれ、航空機が最後の勝敗を決するやうにいはいはれますが、航空作戦と艦隊作戦の關係といつたものはどうなつてゐますか。最後はやはり艦隊を中心とした艦隊が出て、勝負を決するものでせうか、それとも航空戦力で勝敗が決するものでせうか。

友貞大佐 航空機なるものは、今時の海戦において勝敗の端緒を開くものであることは常識であるが、大體航空戦と艦隊戦を二つに分けて考へるのは、間違ひである。飛行機はあたかも彈丸の役目をするもので、之を撃ちだすものが母艦であり、之を持ち運ぶのが艦隊であります。だから航空母艦は砲身であり、砲身を運ぶのは艦隊であるともいへるのであります。航空艦隊は孤立するものではないのでありまして、例へば砲が強いから身體が強健だとはいへない様に、これを有効に使ふのは、その人の頭にあるのでして、艦隊作戦と航空作戦とは分けられないものです。潜水艦の發達は、艦隊にとつて替るだらう、といふやうなことが、日露戦争後には盛んに出てゐましたが、事實はさうではありません。艦隊の攻撃の武器が變つただけであります。

記者 戦争のやり方が變つたといふ譯ですな。

友貞大佐 戦ふやり方、方法では變るが、原理は變らないのです。重慶が爆撃に依る瓦の片で、河原のやうになつてゐて、只外國の領事館だけが無事に残つてゐるといふ状態であるのに、三年かゝつても取れないのです。やはり足で踏まへなければ駄目です。それと同じやうに、海上作戦でも最後はどうしても軍艦が出なければいけないので、飛行機は推進力を與へるだけであります。ガダルカナルでも制空